

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520503

研究課題名（和文）九州における織豊期城郭に関する研究— 旧族大名大友氏と小早川氏の比較を通して

研究課題名（英文）Study on the castle of Shokuho(織豊) period in Kyushu district

研究代表者

木島 孝之 (KIJIMA TAKASHI)

九州大学・大学院人間環境学研究院・助教

研究者番号：20304850

研究成果の概要（和文）：

同じく旧族大名の出自を持ちながら、豊臣政権下の九州経営と朝鮮出兵という事業の中で政治的環境を大きく異にした大友氏と小早川氏。この大友氏の居城高崎山城と小早川氏の居城立花山城・名島城の縄張りの調査を行った。そして、これらの縄張りの構造の分析をとおして、一、九州における織豊系縄張りの受容の形態とその過程、二、豊臣大名としての両者の違いを解明した。これによって、城郭の縄張りという「物証」史料の面から、豊臣政権による九州経営とそれに続く朝鮮出兵の内実の一端を浮き彫りにした。

研究成果の概要（英文）：

Both the Otomos and the Kobayakawas, who had long kept the old feudal order, were compelled to submit to the Toyotomi Government. However, there was a striking difference in the political position between them under the Toyotomi control over Kyushu District. The invasion of Korea by the Toyotomi Army made the difference stand out, which truth can be established by the research on the ruins of the castles listed below: Takasaki-Yama Castle, where the Otomos resided; Najima Castle and Tachibana-Yama Castle, where the Kobayakawas resided. Close field surveys of the ruins have also made it clear how and to what extent the two lords accepted the ground plans developed by both the Oda Army and Toyotomi Army; what their political stand really was under the Toyotomi control over Kyushu District. Besides, closer examination of the ruins has thrown a new light on some hidden facts concerning the invasion of Korea by the Toyotomi Army.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総計	3,500,000	690,000	4,190,000

研究分野：日本城郭史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：城，縄張り，豊臣，九州，高崎山城，立花山城，大友氏，小早川氏

## 1. 研究開始当初の背景

当時、城郭研究の分野では、「縄張り研究」

と称される新たな研究手法が1980年代の提唱以来、深化を続けていた。その研究手法と

は、城跡の遺構踏査から「縄張り」（曲輪、堀、土塁、切岸、石垣等で形成される城郭のかたち）の構造を明らかにし、その分析の結果から城郭を創出・規定した社会や権力の様相を解明するものであった。そして、この研究の見地から近世城郭の成立過程を解明し、戦国末期から近世初頭社会の歴史像を捉え直す動きが考古学、史学、歴史地理学はじめ各方面に少なからぬ影響を与え始めていた。

近世城郭の成立過程を端的にいうと、織豊系縄張りの全国展開と在地系縄張りの淘汰の過程にある（なお、織豊系縄張りとは、織田・豊臣氏系勢力が創出した縄張りであり、その根幹理念は枅形虎口・横矢掛り・大土塁・曲輪の墨線の直線的な処理・高石垣・礎石・畿内系瓦などの高度な技術的パーツを有機的に用いつつ主郭への強い求心性を追求する点にある）。その意味で、近世城郭を創出した社会や権力、技術の構造を解明するには、地域の在地系城郭と地域に貫入された織豊系城郭の縄張りの比較研究が重要であった。中でも特に九州の様相が重要であった。なぜならば、九州は旧族大名の割拠地帯であり、当地では在地系縄張りが織豊系縄張りによって淘汰・変質されて行く姿がより鮮明なかたちで検出されると予測できたからである。そのうえ九州は、近世国家形成のうえで重要な役割を果たした朝鮮出兵と緊密に関わる地域だけに、当地での近世城郭の成立過程の解明は全国史の観点からも注目すべき課題のほずであった。しかしながら、九州の「縄張り研究」は中央（関西）の研究レベルに鑑みると、著しく立ち遅れた状態にあった。殊に、本来なら地の理を生かして研究をリードすべき立場にあるはずの地元研究者の間で、全国の最新の研究情報や視点を無視した、あるいはそれを大きく誤解・曲解した“郷土の城自慢”の次元に陥りそうな遺構評価や見解がかなり目立っていた。さらには、それが定着しかねない状態にもあった。そこで、最新の研究成果を眺みつつ、九州における織豊期から徳川政権初頭期にかけての城郭の縄張り構造を解明することが城郭研究の早急の課題といっても過言でなく、これは城郭研究の空白地帯を克服することでもあった。

また、2001年8月に府内大友氏館が国指定史跡に指定されたことで、大友氏関連遺跡への関心が全国的に高まっていた。その中で、大友氏の城郭から同氏の権力構造を再考する研究が盛況を呈していた。その集成といえるものが、『大分の中世城館』第4集 総論編（大分県教育委員会、2004年）、『第4回北部九州中近世城郭研究会大会 高崎城をめぐる諸問題-大友の城を考える-』（大分市教育委員会・大分県考古学会共催、2004年）であった。これらは、いずれも高崎山城の現存遺構を在地系縄張りの延長上に捉え、その成立年

代を島津氏の府内討入（天正14年12月）以前と結論づけていた。つまり、豊臣期には特に改修がなかったとしていた。この理解の上に、高崎山城の縄張り構造の分析結果を基幹史料として用いた大友氏の権力論が展開されていた。しかし、筆者が事前に行った予備踏査では、高崎山城に織豊系縄張りに影響を受けた改修が施されていることは確実であり、議論の余地はないと思われた。しかも、その技術の運用形態は、織豊系縄張りの根幹理念を骨抜きにして高度な技術的パーツのみを抽出して在地系縄張りの中で強引に消化した、亜流”の織豊系城郭と呼ぶべきものであった。これは、その他の九州旧族大名における織豊系縄張りの受容形態（これは拙著『城郭の縄張り構造と大名権力』、九州大学出版会、2001年、で解明した）とも共通するものであった。大友氏の権力像を再考する基幹史料に用いている高崎山城跡の遺構の評価に事実認定の段階で既に大きな誤りがあるとすれば、当然にして今後の大友氏研究、さらには朝鮮出兵に絡んで豊臣政権論にも大きな影響が及ぶ。また、詰城である高崎山城に、歪んだかたちながら織豊系縄張りの影響が確認できるとすれば、現在、戦国期遺跡の視点でしか捉えられていない府内大友氏館・府内町にも豊臣化の影響が何らかの形で及んだ可能性を視野に置く必要があり、今後の調査・整備の方向性にも関わってくる。事実、府内大友氏館・府内集落を眼下に望む台地に位置し、府内の主要な構成要素と考えられる上野原大友氏館には、織豊系縄張りの影響を思わせる巨大な枅形らしき虎口跡が存在する。したがって、盛況を呈しつつある府内大友氏館・府内町研究および大友氏研究の今後の方向性を左右する意味でも、高崎山城跡の遺構評価の訂正は早急の問題であった。

以上の研究背景の下で、本研究では九州役から慶長期に焦点を当てた城郭の縄張り構造を解明する研究を行った。具体的には、豊後国主大友氏の居城高崎山城（府内大友氏館・上原大友氏館の詰城）と、筑前国主小早川氏の居城立花山城・名島城の縄張りの構造を解明した。特にこの3つの城を研究対象とした理由は、大名の政治的立場と城郭の縄張り強い相関関係にあることを検証するうえで、これらが極めて有効な事例になると考えたからである。そして併せて、縄張り研究の方法論の深化を目指した。特に前掲著書と「九州における近世過渡期の城郭の縄張り構造に関する研究-筑前立花山城塞群の縄張り構造からみた九州地域史の様相-」（奨励研究A、平成11・12年度）をとおして得た、豊臣の九州経営と朝鮮出兵の実像を考えるうえで九州旧族大名の城郭の縄張り構造は極めて有用であるという着想をさらに深化、発展させるための研究を行った。

## 2. 研究の目的

小早川、大友氏は、ともに旧族大名の出自を持ちながら、豊臣政権下においては、かなり異なる政治的立場に置かれた。すなわち、小早川氏は、九州統治とその先に予定されていた朝鮮渡出兵の鍵を握る存在に位置づけられ、筑前入国を強要された。さらには、織豊取立大名以上の期待を負わされて政権からの強力な梃入れを受けた。いわば“親豊臣派”旧族転封大名ともいえる大名である。一方、大友氏は、鎌倉守護に系譜を持つ伝統に根ざした生粋の居付旧族大名である。

そこで、両氏の居城の縄張りを予備調査したところ、大きな差異があることを確認した。すなわち、立花山城は、織豊系縄張りの規範に則したもので、しかも当期の織豊系城郭の中でも最新鋭のタイプであった。また、名島城は開墾で大きく変容しているが、主郭跡に多量の畿内系瓦と、大ぶり石材の石垣が残存しており、織豊系縄張りの規範に則した城郭であった。一方、高崎山城には、在在系縄張りの原型の上から戦国期九州では全く確認できない異質な技術、つまり織豊系縄張りの影響としか考えられない改修痕跡が確認できた。しかしながら一方で、この改修形態は、縁辺通路に沿って曲輪群が並列する従来の在在系縄張りの骨格の中に、織豊系縄張りの技術的パーツを変則的に改変して歪んだ形で持ち込んだ、“亜流”の織豊系城郭と呼ぶべきものであった。

このように、小早川と大友氏の豊臣政権下における政治的立場の違いと居城の縄張りの差異には強い相関関係があるように思われた。つまり、立花山城・名島城と高崎山城の縄張りにみられる顕著な差異は、同じ旧族大名ながらも、朝鮮出兵という国家事業の基幹部隊に選定され、政権側の強引で強力な梃入れの下、豊臣大名への転身を押し進められて行った小早川氏（毛利氏）と、自助努力による豊臣大名化を迫られ、その方向性を手探りで模索した大友氏の政治的立場の違いをストレートに投影したものではないか、との予見を立て、この確認を行った。この予見の妥当性が確認できれば、立花山城・名島城、高崎山城の遺構は九州地方史のみならず、豊臣政権論を語るうえでも重要な「物」史料となるはずであると考えた。そして、明らかにした3城の縄張りを詳細に分析すれば、第一に、九州における織豊系縄張りの受容の形態と過程を解明する有力な事例研究になると考えた。これは近世城郭の成立過程を解明する作業にも繋がる。第二に、縄張りの構造を通してみた旧族大名小早川氏と大友氏の「豊臣大名化」の差異から、豊臣政権による九州経営と朝鮮出兵の内実の一端を浮き彫りにできるはずであると考えた。この二点を本研究案の具体的な目的とした。

## 3. 研究の方法

まず、予備調査の結果を踏まえて、研究方法を決定した。遺構の状態が良好な高崎山城跡については、現地踏査で縄張り図を新規に作製し、城の縄張りを掌握した。なお、高崎山城跡は諸所で岩盤露出や崩落が見られる複雑な地形であるため、細部遺構の評価・判別が難しい箇所が幾つもある。従って、通常の縄張り図で多く用いられる1/1,000縮尺の図では縄張り分析の要点となる細部の表現が困難である。よって、高崎山城の縄張り図は縮尺1/500で作製した。また、現地調査で作製する野帳も1/200縮尺とした。立花城跡については、以前に作製した1/1,000の縄張り図を用いることにした。それは、高崎山城跡がかなり広大で経費・時間に制約があることと、同縄張り図でも研究目的に十分に叶うことからの判断である。そして、破損の著しい名島城跡については、古絵図、旧航空写真、旧地籍図、文献記録・発掘調査報告書を用いて可能な限り縄張りを掌握することにした。

掌握した3城の縄張りを分析した結果に、遺物（瓦）の分析結果、さらに文献史料から看取される当期社会と大名の権力状況を勘案しつつ、研究目的に即した考察を行った。

## 4. 研究成果

研究成果の一部はシンポジウム等で公表したものもあるが、総合的に集めた成果は3つの論考にまとめた。これを資金の都合がつき次第、調整を加えて研究報告図書として刊行するため、現在までにその基となる版下原稿を作成した。作成した論考の題目と版下原稿の体裁は次のとおりである。

第Ⅰ部「筑前立花山城跡が語る朝鮮出兵への道程Ⅱ-小早川隆景による立花山城大改修の実態とその史的意味-」

第Ⅱ部「名島築城にみる小早川隆景の筑前国経営の実像-小早川氏の大名領国経営と豊臣政権の九州支配の相克-」

第Ⅲ部「豊後高崎山城跡をめぐる諸問題-高崎山城跡にみる豊臣政権期大友氏の実像-」

A4版-25字×40行×2段組-122頁(但し、本文のみ、図版・写真分は含めていない)  
付図-高崎山城縄張り図 1/500

-立花山城縄張り図 1/1,000

以下、各部ごとに結論の要旨を示す。

【第Ⅰ部】 城跡遺構の踏査結果から、立花山城跡に織豊系の縄張り技術による大改修の痕跡が存在する事実を指摘し、その遺構について個別に分析・解説を行った。その内容は、【3】章「立花山城跡に残る織豊系の縄張り技術による改修遺構」で示した。解説を加えた改修遺構は次のとおりである。

井楼山山頂主郭部地区：櫓台を伴って、4 連続する大型の連続型外柵形虎口。虎口廻り以外の塁線部での横矢掛りの使用 2 箇所。織豊系技術の石垣（高石垣。割肌面が平滑な割石石材。裏込め石。布目崩し積み状の技法。算木積み技法）。大粒石材の選択的使用（虎口周り）。

井楼山西側斜面地区：虎口廻り以外の塁線での横矢掛り 2 箇所。

小つぶら地区：櫓台と虎口受けを伴う外柵形虎口。石列・石垣で固めた縁辺城道型の防塁。外柵形状の虎口受を持つ虎口。石垣造りの直線的な曲輪壁面。

イバノヲ・大タヲ地区：空堀とセットになった織豊系石垣技術による登り石垣。喰違い虎口。織豊系技術の石垣（水手部分）。

松尾西側斜面地区：虎口脇の横矢掛り。

表採遺物：畿内系瓦（中心飾三葉・脇飾均整二転唐草の軒平瓦。中心飾五葉の軒平瓦）。

これらの改修の時期と普請の主体について、文献史料と領内の支城の縄張り構造を勘案した検証をから、小早川隆景が筑前に入国して早々に、豊臣政権の意向に従って行った国家事業であると推断した。そして、改修形態の特異性、すなわち、元より数年、短く見積れば半年ほどしか居城として使用するつもりがないにもかかわらず、当期の織豊系城郭では最先端の技術を用いた大掛りな改修を施す点。当期の旧族大名の中にあつて小早川氏だけが、高度な技術・技法体系を要するはずの卓抜した織豊系城郭である立花山城を入国早々にして構築し得た点に、当時の筑前国に絡む歴史事象（豊臣政権による博多町の復興、九州国割りによる小早川隆景の筑前入封）を勘案した結果、豊臣政権にとっての立花山城大改修の目的は、次の 2 点にあつたとする見解を提示した。

①来るべき朝鮮出兵を睨んでの、主力兵站地に予定する筑前国、さらには九州全体の治安維持-九州静謐-の徹底。ならびに、強大な毛利氏を運用しての九州統治の実現と、その責務の同氏への転嫁。

②朝鮮出兵の主力に予定する毛利氏の軍事構造の一大改革、つまり、戦国期領主時代以来の古い体質を色濃く引き摺る軍事技術や軍団構成・秩序の改革による「豊臣化」の促進。それに向けた当面の課題である織豊系城郭を構築する能力の早急なる習得。

さらに、上記に即して小早川隆景の立花山城の大改修の史的意味を整理すると、以下の 3 点にまとめられるとする見解を提示した。

i. 立花山城の大改修は、朝鮮出兵が九州出兵の終了（天正 15 年 6 月）をもって、秀吉の関白補任（天正 13 年 7 月）直後の意志・構想段階から遂に現実味を帯びた作戦行動として本格的な始動段階に突入したことを

示唆する事業である。

ii. 立花山城の大改修は、旧族大名である小早川氏（毛利氏）が織豊系の縄張り技術を初めて本格的に実践することで、「豊臣大名」への転身の道を歩む一大契機となった事業である（無論、「豊臣大名」への転身が小早川氏・毛利氏側の主体的選択によるものであつたか否かは別問題である）。豊臣政権の側に即せば、来るべき朝鮮出兵へ向けて小早川氏（毛利氏）の「豊臣化」を促進するための“梃子”の役割を果たした事業である。

iii. 立花山城の大改修は、九州における初の本格的な織豊系城郭の出現であつた。その意味でこの改修は、九州の「豊臣化」（織豊系縄張りを規範に持つ豊臣政権の軍事的文化圏への参入）の第一歩を刻んだ、いわば、九州における近世社会の幕開けの“洗礼”となった事業である。

【第 II 部】 現在までに揃った史資料を基に、名島城の縄張りを城下町の形態を含めて可能な限り推定・復元した。そのうえで、本書第 I 部の中で立花山城大改修と一連のものであると評価した名島城普請の豊臣政権側にとっての目的、その史的意味をさらに深く掘り下げる考察を行った。そして、名島城の縄張り構造に豊臣政権の九州支配との関係を絡めつつ、小早川隆景の筑前国経営の実像について以下のような見解を提示した。

①名島城の縄張りは、天守、織豊系石垣、石組みの暗渠を伴う巨大な（門口 11m）内柵形虎口、横矢掛り、礎石建隅櫓、畿内系瓦などを用いつつ、主郭への求心性を追求する点で、本格的な織豊系城郭と評価すべきものである。特に要害部については近世城郭に直結するような仕様の造りであつた。

②名島城の築城には豊臣政権の意図が強く反映されていたという意味でいうならば、名島城を“秀吉の城”とみることができるが、その点をあまり必要以上に強調しすぎると、旧族大名毛利氏の運用を基軸に据えて計画された朝鮮出兵の戦略構想を大きく見誤る危険性があり、注意を要する。

③名島城は城郭部の様態に比べて城下町の町屋地区の規模がかなり貧相で、この点に特異性があつた。これは、豊臣政権が朝鮮出兵の一環として優先的に進めた博多町の復興と育成の前に、小早川氏の領主権が飲み込まれた特殊な状況を投影したものと考えられる。

【第 III 部】 城跡遺構の踏査から、戦国期大友氏時代の遺構と理解されている高崎山城跡に織豊系の縄張り技術の影響を受けた大改修の痕跡がある事実を指摘し、その遺構について個別に分析・解説を行った。その内容は【4】章「高崎山城跡に残る織豊系の縄張り技術による改修遺構」で示した。解説を加

えた改修遺構は次のとおりである。

「新」主郭部地区：石壁壘・横堀・大堀切・堅堀・堅石壘の構築による「新」主郭の創出と、その形状の矩形への整形。「新」主郭の正面虎口での立石・鏡石の使用。虎口・土橋を挟み、「新」主郭両角に配されたサイズの規格化（2.8m角）を指向した石組み正方形櫓台2基。土橋で「新」主郭と緊結された馬出状曲輪。その土橋の側壁での巨石の使用。その土橋と繋がって馬出曲輪内で「L字形」の動線を成す石列。馬出状曲輪の内枳形虎口。石列で固めた馬出状曲輪への通路。「新」主郭上段の儀礼・格式性を意識した門柱石を伴う引込み通路状の虎口。

縁辺城道地区および東部地区：旧来の縁辺城道沿いに敷設した横堀の機能を兼帯する延長700mに及ぶ防塁（大半が石垣造り）。この防塁による単調な曲輪配置の克服（縁辺城道に沿って単調に並列する旧曲輪群の一体化）。城域のコンパクト化を指向して、旧曲輪群を整理し東辺を画した防塁石垣・堅石壘・堅堀。長城型防塁石垣東辺の横矢掛り掛りを伴う虎口。「新」主郭から縁辺城道に向けて降ろした仕切りのための堅石垣。縁辺城道内に防御区画を形成するサイズの規格化（4.5m角）を指向した石組み正方形櫓台。その石組み方形櫓台が長城型防塁石垣壁面に対して成す横矢掛り。サイズの規格化を指向した2.8m角の正方形櫓台と内枳形虎口の付加によって城道口を押さえる橋頭堡に改変された腰曲輪。旧曲輪を切り捨てる土塁。

大手口地区：長城型防塁石垣と堅石壘によって形成された、姫路路城「は」門に類した変則的で巨大な（門口幅6m）外枳形状虎口。大手口の差別化を指向し、その直下の城道側壁に施された石列。大手虎口両脇に配されたサイズに規格化を指向した石組み正方形櫓台（4.5m角）2基。大手虎口の門口での立石・鏡石・巨石の使用。大手虎口の東側面を固めるため、サイズの規格化を指向した4.5m角・2.8m角の正方形櫓台で構築した門口に横矢が効く食違状虎口。正方形櫓台と土塁の敷設によって、手口背後の虎口空間に対し「逆心曲輪」を成す曲輪。

「旧」主郭部地区：「旧」主郭の西・北・南壁面（城外側）に土塁を設ける（主郭がある西側壁面には設けない）ことによる、「新」主郭への求心性の創出と、旧主郭の下位曲輪への再編。同目的のため、「旧」主郭からの両端部から降ろされた堅石壘2条（城外である西側方向外に向けて構える）。「旧」主郭内を経由して「新」主郭へ向かうように経路を変更するため、縁辺城道内に設けた堀障子の機能を兼任する堅石壘。「新」主郭に隣接して比高に優る曲輪を意図的に

未処理とするで、強引にでも「新」主郭部への求心性を創出しようとする指向。

石垣：在地系技術を踏襲しながらも、「新」主郭への求心性の強化と曲輪の一体化を指向した石垣の用法（「新」主郭の正面を相対的に高く積む。旧曲輪群の再編の鍵となる縁辺城道に沿った防塁に集中的に用いる）

織豊系縄張りの影響を受けた改修遺構の解説に次いで【5】章では、縄張り全体を通してみた改修形態の特徴を分析した。そして、用いられている外枳形虎口・馬出曲輪・内枳形虎口の形状が本流の織豊系城郭のものに比べて変則的であること、石垣の用法は織豊系縄張りの規範に沿うものの、石材の加工や積み方などの技術・技法は在地系石垣のものをそのまま援用していること、旧来の骨格（縁辺城道に沿って曲輪群が一直線上に単調に並ぶ）を克服する努力がみられるものの、小手先の処理の感が強く、織豊取立大名が在地系城郭を取り立てて改修した織豊系城郭の手法と比べると大胆さに欠けることを指摘した。ここに「新生」高崎山城が、「亜流」の織豊系城郭であることと、その改修の主体が豊臣政権参入後の大友氏であるとする予見を再確認した。高崎山城跡を「亜流」の織豊系城郭とみる見解は従前の拙稿でも指摘していたが、新たに確認した遺構を加えることで自説の妥当性をより強固なものとした。

【6】章では、戦国期大友氏時代の遺構と理解されている高崎山城跡の評価が「亜流」の織豊系城郭に改まることで再考の必要が生じる幾つかの問題を考察した。具体的には4つの問題を取り上げた。6-1節では、高崎山城の縄張りから豊臣政権期の大友氏の実像を再評価した。ここでは、「豊臣化」という意味では大友氏が他の当期の九州旧族大名からは一步抜きん出た位置にあったことを指摘し、従来いわれるほどに脆弱な権力体ではなかった可能性が高いとした。6-2節では、大友氏の改易理由を再考した。ここでは、改易の要因を当主権力の脆弱さだけに帰着させるのではなく、むしろ豊臣政権の「恣意」の関与に注目する必要を説いた。6-3節では、豊臣政権期大友氏の「本拠 府内再生」について検証した。ここでは、豊臣政権期の大友氏の本拠は臼杵に一元化されていたわけではなく、「一領主」の立場において「家政」・「領国経営」の比重を占める「臼杵」と、豊臣政権との関係において「藩屏国」豊後の「政庁」である「府内」が並立する二元的状態にあったとした。そして、これは当期大友氏が、回避し難い「豊臣化」の波とそれへの適応の必要性を十分に自覚しつつも、完全に払拭し得ない（あるいは、容易に制御し難い）伝統的旧族大名領主としての自立（自律）への強い志向性を持ち、領主として採るべき道への

決断に迷いと交錯を持ち続ける状態にあったことの投影であるとした。そして、「豊臣化」を強く指向しつつあった大友氏の動向と豊後国政庁に対する豊臣政権側の認識、天正20年2月の府内近郊「家島」への本拠移転計画（「新府内」とも称すべき「府内」の再構築）に鑑みれば、当主の滞在日数の比重だけを理由に、豊臣政権下における府内の本拠としての意味を二項対立的な観点でもって軽視して白杵の下に置くべきではないとした。6-4節では、高崎山城の縄張りとは毛利・小早川氏が構築した立花山城・名島城・広島城・新高山城の縄張りにもみられる差異の意味を考察した。そして、これは旧族大名の「豊臣化」に際して豊臣政権の対応姿勢に意図的な差異が設けられていたことを体現したものであるとした。また、その意味で、九州旧族大名の中にあつて頭一つ抜き出たともいえる“亜流”の織豊系城郭の姿を採った高崎山城の縄張りとは、当期大友氏における織豊系縄張りの技術・技法の習得の有無や程度の問題を示すものというよりも、当期旧族大名が自助努力で「豊臣大名」への転身を試みた場合の、権力体質の投影として実践し得た“限界点”であると同時に、自分たちなりの「豊臣大名」像を模索した中での朝鮮出兵段階における“到達点”を示すものであるとした。

ここに豊臣政権期大友氏の高崎山城を事例に城郭の縄張り構造の観点から、文字史料の操作のみで構築された大名権力像の見直しを行い、従来の理解と異なる像を提示した。

以上、3つの論考をとおして、文字史料に偏向して構築されている従来の豊臣政権像に異見を提示した。これによって城郭の「縄張り研究」の有用性と必要性を説いた。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 木島孝之、「都市の成り立ちと歴史的文脈-近世都市福博(福岡・博多)を題材にして-」『都市計画』271、査読無、29-34頁、都市計画学会、2008年2月

〔学会発表〕（計2件）

- ① 木島孝之、「名島城の縄張りからなにがわかるのか-朝鮮出兵を通じた小早川・毛利氏の近世大名への道程」、『名島城の歴史と文化シンポジウム』、九州学研究会・九州考古学会・北部九州城郭研究会共催、2009年2月22日、福岡市博物館大講堂
- ② 木島孝之、「名島城の縄張りからなにがわかるのかII-朝鮮出兵を通じた小早川・毛利氏の近世大名への道程」、『名島城の歴史と文化シンポジウムII』、九州学研究会、

2009年7月26日、福岡市博物館大講堂  
〔図書〕（計3件）

- ① 木島孝之「織田・豊臣の城を歩く-九州の城-名島城、立花山城、肥前名護屋城、南関城、宇土城、角牟礼城、岸嶽城」、『歴史読本』特集 織田・豊臣の城を歩く 2008年5月号、182-195頁、新人物往来社
- ② 木島孝之「立花山城」、福岡県の城郭-戦国城郭を行く』、183-186頁、銀山書房、2009年10月
- ③ 木島孝之「都道府県別日本の名城ベスト10 福岡・佐賀・長崎・鹿児島」、『都道府県別日本の名城ベスト10』、198-205・210-213・222-225頁、新人物往来社、2010年1月

〔その他〕

新聞報道

- ① 「広島城築城に「豊臣の技術」-朝鮮侵略にらみ指導か-「毛利氏主体」通説に一矢」、中国新聞、2008年12月11日朝刊<社会>
- ② 「名島城の歴史と文化シンポジウム」、西日本新聞、2009年7月31日朝刊
- ③ 「博学博多 ふくおか深発見 vol.153 「名島城 秀吉の海外派兵への布石-九州初登場の近世的城郭」、西日本新聞、2009年10月28日朝刊
- ④ 『福岡県の城郭』の発刊、毎日新聞、2009年12月19日朝刊

講演・市民講座

- ① 『福岡と雲谷派 城郭襖絵「梅に鴉図」の謎 梅に鴉図の謎は解けるか? -建築史、考古学、歴史学、美術学史の視点から』、2009年2月1日、福岡市美術館講堂
- ② 「立花山城・名島城・吉田郡山城・広島城の縄張りからなにがわかるのか-旧族大名毛利氏・小早川氏の豊臣大名化と朝鮮出兵への道程-」、『ひろしま日本史を学ぶ会 2009年講座』、12月26日、広島県立総合体育館
- ③ 「九州の近世社会の幕明け：筑前立花山城の縄張り構造にみる九州の豊臣化と朝鮮出兵への道」、『シニア大学塾 テクネ・リベラリス リベラルアーツ講座・日本史』、2010年3月21日、西南学院大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

木島 孝之 (KIJIMA TAKASHI)  
九州大学・大学院人間環境学研究院・助教  
研究者番号：20304850

### (2) 研究分担者

( )  
研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )  
研究者番号：